

山人 第1号

八巻建彦君を偲ぶ

森 正 幸

八巻建彦君は昭和25年4月3日午前7時13分、蒸岳より槍ヶ岳対したポーラーの帰途、西岳より大天井岳登之沢コルの第二キャンプへの撤退行動中、赤岩岳附近にて、稜線直下より発生せし大雪崩のため、この山行を最後として二ノ俣谷深く23才の青春時代を山に捧げ尽された。

君は前東京海上火災社長たる連三氏を敬父とされ、三菱電機生産技術部長たる直躬氏を長兄に、八人の御子弟の末っ子として、御兄姉の慈愛を一身に、その恵まれた環境の下に、東京の独逸学協会中学より神戸工専精密工学科に入学され、この山行が終り次第帰郷の上、カーネギー工業大学への留学が待っていた。

在学中は夙川の長兄宅より通学され、学校では平常は遅くまでサッカー部のハーフとしてグラウンド疾しと駆け廻り、日曜日ともなるとアルピニズムの鬼として六甲の岩に対して居られた。

我々が敗戦直後の混乱時代に少しでも有意義な登攀が出来たと自負出来るならば、君及びその御家族の御協力で負ふところが大である。君宅の地下室が我が部の倉庫であり、君の部屋が我がアルピニズムの温床であつた。君の地道な性格よりじゅんじゅんと説く山への道は聞く者をして深く感じしむるものがあつた。それが今日の神戸大学山岳部の学生諸君が進んでいて呉れるのを見るにつけ、我々のゼネレーションで、今日最も君を必要とするのが痛感され、先に逝つてしまつた君が惜しまれて仕方がない。

君は寡言にしてその一言々には熱があり、その命令はジツヘルにして且つ最も要を掴んでいた。又いつの合宿においても責任感の旺盛なことは、全部員の認めるところでもあつた。

あの22年の正月、乗鞍合宿を前にして、君は僕に「戦争中のブランクでスキーの程度が心配なので、皆の行動に迷惑を掛けては申訳がない。」ともらして出発の三日前なのに僕を誘つてくれて、伊吹山頂まで登つたことがある。これなんか君の山に対する態度のごく一端にしかすぎないが、いついかなる山行に対しても君はこの定石を外さなかつたのに………たゞ天運としか思えない………

君のアルピニズムを解するものに奇異の感を抱かせるのは、山岳部報の1948年版に「那須の山々」と題して、相当詳細にそして地道にケルンをつみ上げていることである。この流暢な文章を読むと、君は中学時代その恵まれた境遇は、毎夏を那須高原の別荘に送り、こゝで無意識のうち既にバイオナー的な登攀慾が序々に成長を遂げつゝあつたことと思ふ。合宿の帰途「那須へ君と登れば、僕の宿題にしている岩壁が……」と度々誘つてくれたのに、当時の僕にはボルクス以外考える余裕のない至らざる人間であつたのが、今となつて悔まれる。

君の生前の御希望もあつて、君の一部はあの穂高の又白の林の中に、もう一部は那須岳の岩壁直下に安置させていた。僕達同じ合宿の飯を食つて来た仲間は、今も君が山の彼方で特徴のあつた、あの微笑の醜を向けているだろうと信じている。

君の生活にはいゝ意味で山が深く入り込んでいた。実験にも、読書にもそうであつた。たと

えば君はよくモーニングハイクと言うことを行つていた。シーズン・オフの日曜日は試験前でも、またどう忙しくも、朝早く夙川の自宅を出て、北山池畔で炊飯朝食をとることにしていた。私も一度同行したが、生来の無病者、眠くつて遂に後が続かなかつた。このとき君は秋の涼々しい風を受けながら、越木岩のところで天野貞祐先生の「学生に与ふる書」について批判し、当時の学生々活の不合理性を指摘されたことがあつた。僕も大いに共鳴したことを覚えている。だが常に君の読書欲の旺盛なのには驚嘆していた。

君が家庭にあつては実に恵まれていた。本当の意味で慈母、敬父と申せる御両親であつた。いつか五龍岳からの帰途、槍ヶ岳が我々を押し潰すような威圧感を与える長坂の八巻村に、当時閑居されて居られた御両親をお訪ねしたことがあつた。父上のお伴をして近在の古墳を尋ね廻つたとき、種々説明をいただき、ステツキで純白に輝いた駒の岩壁を指さし「あれをやるか」と申された。僕が立ちどころに返答出来なかつたら君が「卒業までには」と答えて下さつた。翌春東京の松本君と登つた。そのときの霧雨気は君が僕を信じ切つてくれたので、この約束だけはと思つたことがこの登攀を成就させた原動力であつたのでしよう。また母上が手づから蕎麦粉を粘つて下さつたことも覚えている。その蕎麦は僕達山に酔つていた気分を宥さない大きな前庭であつた。僕はあるとき五龍のG5を失敗し、悪戦苦闘の後だつたが、この長坂の二日間僕自身の山の成長が大きくステップを切つてくれたのでした。君が僕より山岳部では何か巾が広がつたのも、すべて山にマツチしていた天性の所爲なのでした。

今南米に居る君の相棒の池田武彦氏が大町にいたとき、「オタケのことを思つてね」としみじみ語られ、いついかなるときでも現役にはと語られた。僕も微力ながらと思つている。「いつか君が安まれる、あの雪の又白に再び鈍先を向けたとも思つています。安んじて冥されんことを祈つている。」

また君が山岳部以外で交られた友人間では、義父の勝山勝平氏を会長として、アカデミック・アルパイン・アソシエーションが設立され、もう五年もの間、君を慕ふ若人が山を継いでいます。君の生前の人徳が大きく成長を遂げていると、僕ごとき者が誇りして歎いているのです。神大山岳部も近き日に必ず君の墓前に快報をもたらすことを信じて戴き度い。

君の遺稿を整理させていたとき、

「10月8日、人間は The End から出発せねばならないと言つたことがあつたが、私はこれをどん底まで入ることによつて向上のみちがひらける。

つまり、死に会いそうな所まで行つてはじめて進展がある、と言う意味に解釈する。死に直面する度に、全ての力を拵いて努力すれば向上し得るのである。」私はこの一文は君のアルピニズムから出たすべてではないと思いますが、先述の如く山が大きく君の私生活に割り込んでいたのを羨しく思ひます。他に哲学的な文章が多かつたのですが、あの最後の山行の日、多忙な中にも「3月21日、この山行、心労は多からう。しかし私の成長である」として擱筆されてある。この一文に私は種々な角度から教えられ、考えさせられたのです。そして最後までリーダーシップを守り、リーダーシップの鬼として散つて行つた君に涙を禁じ得ないのです。君のアルバム最後に「悪友、岳友、森」として僕の写真があつた。君の如き高潔な山男の中に、一人だけ僕が悪友としておいてくれたのが嬉しい。若いままに在つて下さつたら、岳友はフロックだと大笑ひするのに、在学中酒や煙草に縁が無かつた僕だが、今は君と山の話に、また君がよく唄つたグーテン・カメラーデンの歌に大いに祝杯を上げ、ますます啓蒙されたことでありましよう。

東大へ転じられた平田教授が君を追憶され「借しい」と申され、不思議に先生が君の写真を

卒業前に入手されたのも虫が知らせたのかと、しんみりされた。やはり悪友が隣席している二人のものらしい。僕が君の思っている仕事の半分も出来ないで、悪友も今は寂しく君を回身させていた多くのが、何よりの励みになります。

最後に君の生前を偲び、義父勝山勝司氏が当時君に捧げられた歌を転記させていただき再び冥福を祈念させていただきます。

死ぬべくは信濃の山の雪の中と
我は念へどあわれ建彦
春だにも桜埃きたれライラツク
庭に匂へれ還らぬ建彦
雨の中に鶯啼けり朝出に
建彦の遭難念ひゆく時
冢言にて常静かなりし君が部屋に
今もやあるとまたのぞき見る。

(神戸大学神戸工専・昭和25年卒)

編輯子(註) この遭難は昭和25年3月上旬より4月上旬にかけて、神戸大学山岳部の前身的形態の一つたる、神戸大学神戸工業専門学校山岳部により行われた、燕岳より槍ヶ岳へのポーターの際、起つたものである。

中川君の思い出

金井健二

始めて彼を知つたのは志賀高原の合宿であつた。一日遅れて夜暗くなつて小屋に着いた筈等に、にこにこ食事やお茶の面倒をみてくれた一年部員が彼だつた。夏山合宿に参加出来なかつた筈は、彼が姫路に居つた関係もあつて、不覚にもその時道名前も知らない有様だつたけれども、五日間一緒に生活をして、何となく「こいつは有望だぞ!」という期待を抱いた事をおげえている。この合宿で彼の撮つてくれた写真——木戸池の辺りだつたか僕の後姿を逆光で撮つた、中々の傑作——は今もアルバムに大切に張つてある。

次いで春の遠見尾根の合宿にも、彼は唯一人の一年部員として参加して大いに頑張つた。天候にも恵まれて、彼もその感激を山日記につづつている様に、あの楽しい遠見での合宿は夢の様に楽しいものであつたが、この時以後、彼を三回生のリーダーとして考える様になつた。

其の後、度々一緒に山に行き、秋には彼も六甲合にやつて来て、彼との接触も多くなるにつけ、彼のいろいろの性格もわかつて来た。真面目で勉強好きな事、陽気であつさりしているけれども多分にお天気屋であり、典型的な末つ子タイプである事、等々。彼が何か気に入らぬ事のあつた時にぶつとふくれるのは有名だつた。「あのふくれつ顔をせぬ様になれば、中川もいいリーダーになるがなあ。」と皆とよく話合つたものである。しかし彼のそのふくれつ面は彼の人間の魅力にもなつていた。相手にとまどいを感じさせても、不愉快さを感じさせるものではなかつた。僕もたしか二回ばかり彼にふくれられた記憶をもつている。始めは27年の夏、洞沢合宿を終えて縦走に移る際、彼は烏帽子より後立山全縦走のパーティーであつたが、それに先立つて北鎌尾根の試踏に同行を強めたのである。この後彼は半日以上も一行に遅れ、相当のピッチで追わねばならなくなり、三俣で追い付いたものゝ白馬迄の全縦走を完成出来なかつたのは、北鎌へ行つた事によるオーバーワークの故だつたのだらうと、今でも気の毒な事をしたと思つている。今一つは春の猿倉合宿の時、天気が中々回復せぬ爲、主稜のアタックが出来ず既定の日数も尽きた時に、二日間の合宿延期を僕が提案した時であつた。しかしこの場合はその翌日絶好の快晴に恵まれて無事アタックも完了し、彼もサポート隊のリーダーとして白馬の頂上に立ち大満足の体であつた。

彼は大変音楽、特にクラシック音楽を愛し、特にベートーベンが好きであつた。猿倉で沈鬱している時、退屈まぎれにクラシックと浪花節について大論争をした事がある。クラシック派の先鋒は彼であり、浪花節派の大將は僕であつた。実際には、僕はクラシックが嫌い、浪花節が好きであつた訳ではなく、むしろその逆であつたのに、何かむきになつて彼と論争した事を覚えている。彼は歌も好きで、当時山岳部内で曲りなりにもヨーデルを歌えるのは彼だけだつた。「ヨーデル歌つて一日中」とか「たつた一人のヨーデル歌い」等だつた。「エーデルワイスの歌」「アルトハイデルベルグ」「旅」「ロツキに春来たれば」等は一語に歌つたものだ。山戸と一緒によく「ピエロ」というのの二部合唱をしていたつて。

二人で追ひ出しコンバの途中から抜け出して大阪駅に駆けつけ、伊吹山にスキーに行つた事も懐しい思い出である。

猿倉の帰途乗鞍に廻つて、すつかり文無しになつて帰つて来た川口と僕が、早朝の名古屋駅か

ら電話をかけて市販の切符まで持参で迎えに来て貰い、朝食を御馳走になり、暖かい家庭の雰囲気であつて頂いた。二階の電車線路越しに満開の桜の木の見える窓辺で、一番好きな曲だといって英雄交響曲のLPを聞かせてくれた。風呂敷一杯のリソを御土産に貰つて、駅送送つてくれ、大阪迄の車中リソを囁り続けであつたのを思い出す。

彼はよく太つている割合に運動も上手で、山岳部野球チームの名捕手であつた。スキー部に堂々挑戦しての、六甲台グラウンドに於ける世紀の熱戦も、山戸、中川のバッテリーの活躍、森田、中川を中心バッテリーの好打にもかゝらず、レフトの僕とセンターの田中(ライトはメンバー不足で欠場)が外野フライは万才して、後にそらして本塁打とし、ゴロはトンネルして二塁打三塁打としたりした爲に、大乱戦の末に惜敗したという珍記録が残っている。

6月の早月尾根は彼が始めてリーダーとして行つた登攀である。不幸にしてスリッパに依る小事故があつたけれども、その機敏な処置と責任感のある行動は、次期リーダーとしての我々四年部員の期待を十分満足させてくれるものであつた。

最後の山行となつた北岳合宿では、彼とはずつと同じテントに寝起きした。彼の死ぬ前夜、各テント間の歌合戦で彼はあの気風のよい時に発する「バツカヤロー! オンチ! オンチ!」を連発して大変愉快そうであつた。それも一段落ついて、テント内で恋愛論を斗わした時、主として論争の中心となつた所は、彼の「学生は勉強を第一とすべきで、学生である間はあの妨げとなる様な恋愛はすべきでない」という主張についてであつたが、彼の恋愛観が非常に真面目で純粹で潔癖でプラトニックなものである事は、容易に理解できた。後になつて、彼の親友の早瀬君の文により、彼の大変プラトニックな恋を知つて、この時の事を思い出して、全く中川らしいとほゝえましく思うと共に、多感な青春を散らしてしまつた彼を、可愛そうで可愛そうでたまらなく思つた事である。シュラフに入つてからも何時になく家庭の事などしみじみと話し合い、彼が暖かい家庭に恵まれて育つた事の幸福を話してくれた。寝る前に彼の云つた「金井さん、姉さんで本当にいいものですね」という言葉は今でも耳に残っている。

彼が北岳に逝つて早や三年になろうとしている。当時の強烈な印象も徐々にではあるが薄れつつあるし、彼の思い出も過ぎ去つた日の淡い追憶と化しつつあり、以上の様に断片的にしか書きつづる事が出来ない。しかし又完全に忘却の彼方に行つてしまう事も決してない。彼も、八巻さんや下津君と共に、発展する神戸大学山岳部の尊い礎を築いた人として我々の心から消える事はないのだ。懸案の部報発行にあつて彼の思い出を書かして頂いた次第である。僕自身健康になり次第、思い出の北岳に行き日根御池畔に中川君を訪ねたく思っている。(新制2回)

(編集子・註)

昭和28年8月北岳で合宿をした金井、滝本、川口、田中、山戸、森田、中川、直木、川畑、大谷、高木のうち森田、中川は8日北岳第二尾根へ向け出発した。然しセカンドの中川は10時20分頃、森田がジツヘルを行つている途中バランスを失い一瞬滑落した。その上運悪くザイルは鋭角な岩角で切断され、彼は墜死したのである。

下津 実君を偲んで

仲 林 正 則

死よ甦るなかれ、汝を呼びて力あり、
恐るべきものとなすものあれど、
然はあらず。

汝が倒したりと惚るゝ人も死するに非ず、
哀れなる死よ。

汝は運命奇禍暴君また希望たえ人々の奴隷毒物と戦争と疾病と共にこそ
汝はあれ

たゞ眠らしむることよりいへば、
罌粟、さては魔呪すらも汝が一専よりは
陰まされるものを。

さらば汝何すればとて甦るや?
やがてたまゆらの短き眠りすぎなば
我は永遠に目覚め、

もはや死はたえてあらじな、
死よ死すべきは汝なれば!

— ジョン・ダン —

x x x x x x

久しく身近かな者の死に接しなかつた為、下津君の突然の死という訃報は私に大きな動揺を与え、その日より名狀しがたい不安と残虐な失望の為に、胸は苦しさで一杯であつた。——二年間という短かい間の交際ではあつたが、どちらかというとなつた日の多い私の生活は、彼の快活そのものゝ生活により、憂うつはふつとばされていたから……。

それにしても死は人間を生命に直面させるものである。例え人間の誕生という事実さえも、死という事実ほどには人間を生命に直視しえなれないと思われる。それは病気が健康という問題を提起するのと同じようなものであらうと思ふ。

生命とは何か? 生命と死? この疑問に対する解答の一つ一つがまた新たな疑問となつて私に迫り到底私には解決できません。この問題は私が、今、彼の思い出を書くに當つてきて必要ではないのだが、皆様に考へて貰う爲に提起した訳である。で以下思いつくまゝに思い出を書いてみたいと思ふ。

彼との交際は一年生の秋山岳部主催で雪彦山に遊んだことがあつたがその時以来である。以前は法学部学生として、また寮生としての交際に止まり、部屋の行き来も少なかつたし、出会うつても「オス」と挨拶を交す程度であつた。この遊山で私は「私の虚無感を拭拭して呉れるのは山だ」とすっかり魅了され、下津に頼んで山岳部に入れて貰つた訳であつたが、今だにあの時の感

動は忘れえない。彼の三重弁ともいうべきなまりある話し振りでユーモアたっぷり、然も我々にくんぐん迫つて来るので、皆は時には哄笑し、時には無心に聞き入つたものだった。

天真らんまん彼の性格は寮生活に於いても、彼を人気者にした。巷間の小説に散見される明治時代の学生像が真実の姿であるとしたなら、彼こそは余りにも現実主義的、功利的な現代の学生群の中に在つて最も明治的とはいえないだろうか。彼は些細なことを気に病んだり怒つたりすることはなかつた。(その爲少々非難さるべき事もあつたが、長所と短所は相表裏する事が多いから許さるべきだと思う。)つまり寛大な精神の持主だつたといえる。私は人から同情を求める様な口調で話されるのは大嫌いであるが、そのくせ自分では無意識のうちに哀れつづく話しかけている事に気がつくことがある。そんな時でも彼は嫌な顔もせず耳を傾けて呉れ、アドヴァイスして呉れた。この点とくと尙礼を云いたいのだが親孝行したいと思う時には親はない例えの様に彼はもう居ないのである。然し寛大といつても何事にも口をつくむつていた訳ではない。世に哀れな奴あり、といえどもこれほど哀れな奴はいないのだから、蓋し当然というべきである。いや彼ほど大胆に何事もやり、正義感に燃えている者もめづらしかつたのではなからうか?。彼には不正は許されず、清濁併せ呑むという芸当はできなかつたようで、不正に対しては顔を真赤にして憤怒した。

それを証明する色々な事柄事件は数々あつたが、今はそれにふれる余裕もない。また日頃の彼を知る者にとつては余りに明白すぎて不要であろうと思うので省畧する事にする。

この辺で少し彼との山行の思い出にふれたいと思うが、私は技術的な面で云々することはしないし、又出来る筋合のものでもない。たゞ彼の山に対する愛着がどのようなものであつたか少しも解つて載ければと思つて書こうと思つたのである。一年の秋私が入部して以来、私の参加した合宿で彼の顔をみながつた時は一度もなく、大抵の合宿は参加していた様である。昨年春山は私達はまだ一年であつた爲殆んどベースキャンプ詰で、時折りC1へ行ける位だつたが彼は本当に残念そうな面持で西穂山荘で碁目ならべや、こわれそうになつたスキーで淋しさをまぎらしていた。新人養成合宿では一行のリーダーとして、統率に細心の注意を払つていたが、それでも春山のベース詰という窮屈な生活に比して、のびのびして居たが、あの時の快活な笑顔は未だに忘れることができない。いつも前穂頂上での写真を取り出しては在りし日の彼を偲んでいる。合宿後彼と木全、私、それに東京山と雪の会の雅井氏を加えて、今年の春山攻撃の偵察に向つた。槍沢の小屋での鳥肉スープ、ガマの味、天上沢の小屋での岳ワラビいずれも忘れ難いものだが、それよりも朝目覚めると何か希望に満ちた顔で話しかけて来た彼の顔は思いだすごとに微笑を禁じえない。葛の湯で疲れをいやし一週間ばかりの山ですつかり郷愁にかられた私は、翌日は帰途につけるとそればかり念頭にあつた。が彼は私達に別れを告げて翌日白馬へと向つて行つた。彼は山に溺れていたと云えよう。また彼の山に対してのもつ愛着は殆んど信仰にまで高められていた。だから日頃の生活に於いて、大抵の人のもつているあの競争心からくるせつちささというものは微塵も持つていながつた様に思われる。

今年の春山の計画が具体化して行くにつれて彼の山に対する考え方は益々眞剣味を増し、日常の瑣末なことには、全く構つていられないといった状態だつた。私と二人になるといつも山の話で持ち切りだつた。夏山以来進退を考慮中だつた私を結局部にとゞませたのは彼の山に対する熱意からだつた。

彼は次の年は三年生だつたといつたので人一倍張り切つて居たようである。秋山の荷上げの時、千天の都合の小屋で会つたが、彼は少し研究したいから一人残りたいと思つたと私に話して居たが、結局資金が不足したので、やむなく断念したと残念そうに語つていた。今思い出すと返すがえすも可愛想に思われて仕方がない。第一回の荷上げが終ると直ぐ彼は第二回の荷上げに参加した。彼としても都合が悪いことは明白である。彼は万難を排して参加したのであつた。

× × × × × ×

最後に私の心にいつまでも残つていること、それは、もつと深い友情をもつておきたかつた、彼を愛しておきたかつたということです。

今世の愛した全てのものが私の胸を引き裂きます——もうこの世には居なくなつてそれらを楽しむことはできないからです。でも今私の胸を引き裂くものは死の恐怖でもなく、また未来への恐怖でもありません。生の諸々の部分、生のあの美しい部分、行動し、見、聞き、感じ、味わい、享受すべき、生のあの奇跡にも似たすばらしい歡喜の数々を、このまゝよく知らずに死ぬには彼は余りにも若すぎる、生!! それは何という喜びであらうか! 生きている私達はもつと生の喜びについて叫び歌わねばならないのではないのでしょうか? 生命をもつと我々は愛し、意識する事が必要だと考えます。

彼の事を思い出すと気が乱れて筆が進まないのですが頭に浮んで来たことを断片的ですが書いてみました。

(装備係・洪三年)